

## 豆電球

「ひろし君の豆電球がなくなりました。」

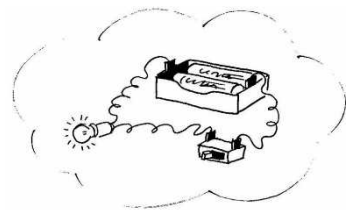
帰りの会で、とつ然、佐々木先生の表情がきびしくなりました。ひろしがロツカーにしまっていた、理科の実験用の豆電球がなくなったのです。（どうせまた、たかしがとったのだろう。）と、ゆうこをはじめ、だれもがそう思っていたのです。たかしは、前にも同じようなことをしてみんなを困らせていました。

「これからみんなに紙を配ります。ひろし君の豆電球をいたずらしてしまった人は正直に書きなさい。名前は書かなくてもよいです。」

早く帰りたいみんなはがっかりして、何度も時計を見ては時間がたつのを気にしていました。一回目も二回目も、配られた紙に正直に書いた人はいなかったようです。集められた紙を見て、先生はこう言います。

「まだだれも正直に書いていません。三枚目を配ります。」

すでに時間は三十分がすぎていました。みんなのため息が聞こえます。（いたずらした人、早く正直に書いてよ！もう、帰りたいよ。）と、なんとなく何人かの目がたかしに向いているような気がしました。教室の空気がはりつめています。三枚目の紙が配ら



れました。ゆうこのところにも、紙が回ってきました。  
(いたずらをしたのは、自分ではないけれど……。)



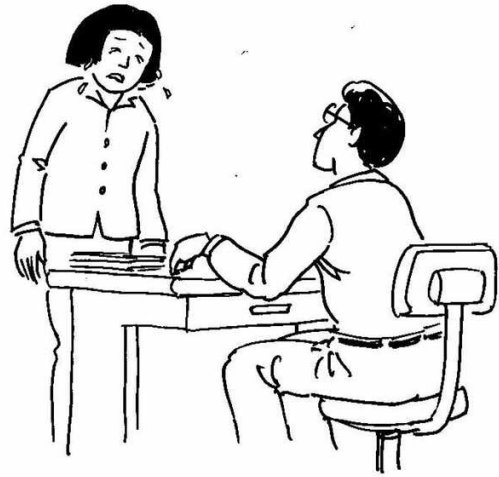
わたしがやりました。

ゆうこは、だれにも見えないように、紙を二つ折りにして提出しました。心ぞうの音が、ドキドキと周りに聞こえるくらい高鳴っています。先生は、集められた全員の紙を一まい一まい見て、

「『わたしがやりました』と書いた人がいました。正直に書いた人は、残ってください。では『さようなら』のあいさつをしましょう。」と、きびしい表情のまま、みんなの前で言いました。

「やっと書いたのか。だったらはじめから正直に書けよな。」

あいさつの後、あちらこちらでそんなぐちが聞こえました。帰りの会から解放されたクラスのみんなは、一目散に教室から出て行きました。ゆうこも、みんなの後ろからついて帰ろうとしました。しかし、とちゅうで、下校するみんなからそっとはなれ、だれのすがたも見えなくなるまで待つてから、重い足取りで教室に向かいました。どう話したらよいだろうと、いろいろ考えると、急に落ち着かなくなり、今にもなみだがこぼれそうになりました。教室では、先生が一人で待つていました。



先生はおこっているのではなく、なんだかとても悲しい表情をしているように見えました。すると、ゆうこにゆっくりと話しかけました。

「これ、ゆうこさんが書いたの？でも、本当はゆうこさんがやったのではないよね。」

先生から意外な言葉をかけられたゆうこは、なぜか分からないけれど、がまんしていたなみだが次から次へとあふれ出てきました。

どれくらい時間がたったのでしょうか。何も答えられずにただずっと泣いているゆうこに、先生は、やさしく話し始めました。